

厚木市史たより 第19号

平成30年8月1日

題字は渡辺華山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。

古代愛甲郡の山寺と

大壁建物へのアプローチ

厚木市史編集専門委員会委員 鈴木靖民

1 鐘ヶ嶽寺院跡の発掘調査から

厚木市域の西南部、七沢の山あいに入った広沢寺温泉の近くに釣鐘形をした鐘ヶ嶽がある。昔は鐘嶽山とも呼んだ。標高五六一メートルの頂上には浅間神社が鎮座するので、浅間山ともいった。富士山をおがむ浅間信仰の場であるが、早くから修験者の修行の地にもなってきた。今は市民のハイキングコースでもある。隣の山には日向薬師の名で親しまれる古代以来の寺、宝城坊がある。祈雨、降雨の信仰で有名な大山阿夫利神社が鎮座する主峰大山の東に位置する。

二〇一八年三月中旬、文化財保護課が古代の遺跡を試掘調査し、寺院の礎石かと思われる石列が出土したという連絡があった。現在、市史専門委員で寺院の考古学に詳しい

い高橋香氏とともに、調査担当者などの案内で鐘ヶ嶽を訪れた。

私が古代の愛甲郡玉川郷に当たるこの山に入って、古代寺院を探るのは三度目だった。最初は一〇年ほど前の夏に、文化財保護課の方々に伴われて小野の神社などを訪ねたあと麓から登り、堆積岩も目についたが、足に吸いつくヒルに悩まされたことが忘れられない。二度目は二〇一五年の早春で、山腹の緩斜面の平場の試掘によって出土した、瓦片、土師器片、鉄滓を見せて頂いた。このあたりは二〇年ほど前に、市史編さんにもかかわっている加藤芳明氏、富永樹之氏の表面採集（地面を道具で掘削しないで遺物を拾う）で、軒丸瓦が二点発見されており（『神奈川考古』三八）、古代の寺院があったのではないかと注目される場所だった。

三度目の今回は車で細い山道を途中まで上がり、そこから坂道を歩いて調査地に着いたが、森林組合の森林保護を訴える真新しい掲示板が目に入った。

鐘ヶ嶽には山頂への参道に一丁目から二八丁目まで、江戸時代の石柱の標識が建っており、調査地は一七丁目の道沿い、標高約三三〇メートルの南斜面にある。試掘は前回（二〇一五年）と同一のスポットなど三か所で行われ、トレンチ1は加藤氏らが採集したと伝えられる地点だったが、特に収穫がなかった。トレンチ2は一八世紀初め、宝永の富士山噴火の火山灰の下に土と山砂が交互に入った層が認められたが、人為的な版築（土を層状に突き固めて基壇などを造る方法）とは断定し難かった。建物の痕跡も

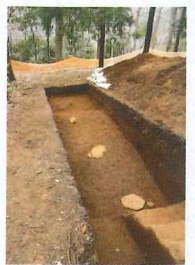


図2 鐘ヶ嶽の石列
ないが、担当者は何らかの作業面という解釈も可能とする。トレンチ3は掘り下げた炭化物の下の面で二つの径四〇センチほどの石が南北に並んで確認され、石の上面が平らなので柱を載せる礎石の可能性はある。すぐ近くには焼土跡が二か所あり、そばで丸瓦片が立った状態で出土したという。瓦を高橋氏は八王子市の御殿山瓦窯の産だとする。そのほか、九世紀の相模型坏と甕などの土師器片もあり、トレンチの壁面に瓦が挟まったままあるのも目にした。その面よりも比高差二メートルの段にも石を検出したが、自然石だろう。

この発掘の結果、このあたりに礎石建ちの瓦を葺いた建物があった確率がより高まったとみてよい。焼土は鉄などを熱した作業の跡で、坏や甕は食器、貯蔵具などで生活臭を思わせる。

一九八五年、市教育委員会が発行した厚木市文化財協会編の『七沢浅間神社とその周辺に関する調査』によれば、第二次世界大戦中、一五丁目付近を開墾した時に、土師器や須恵器が出土したと伝えられ、須恵器は一〇世紀後半に当たるとする。上述した一六・一七丁目付近では瓦片一四片、須恵器の坏片二点を採集したといい、ほとんどが平瓦で、蒐集家だった前場幸治氏は御殿山瓦窯跡の品と判断し、現在、市史編集専門委員会委員の望月幹夫氏はすでに建物があったと推論している。

表面採集の二点の瓦については以前にも

触れたが（『厚木市史たより』一五）、高橋香氏は、一つは六葉単弁蓮華文軒丸瓦と呼び、小田原市の足下郡家周辺にある千代廃寺出土の瓦と同じ範で、もう一つの素縁素弁六葉蓮華文軒丸瓦は国分寺市の武蔵国分寺講堂、同国分尼寺跡出土の瓦と同じで、ともに御殿山窯跡の産とみなす（『厚木市史たより』一二・一六）。

こうして今回の試掘の面積はごく狭く、正確なデータによる考察は公式の調査報告を待たなければならぬ。だがこの成果は、建物跡の存在がにわかには現実味を帯び、それがこのあたりの古代の山寺（山林寺院）の景観とそこに住んで修行に励む僧や法会にどう信者たちの姿をも彷彿させるかのような想像を掻き立てる。鐘ヶ嶽の寺も大山を頂点にして付近の山なみや平地に広がる寺々とともに、古代の仏教と多様な信仰のネットワークの一環を構成すると考えられよう（『厚木市史たより』一三）。

こうした山寺が国境を越えて人々の信仰を集めた可能性は高い。ただ、同範の瓦の存在は生産と流通の広域性、関係性を示すが（武蔵国守が相模などの国司を監察する按察使の制度もある）、それを武蔵の国分寺、国分尼寺の僧や尼の修行の場を目的にして建てられたとは即断できないだろう。

私はだいたい以前、現在、市史の委員の永井肇氏などととも、湖西市で発掘調査に携わった後藤建一氏の案内で、険しい崖をつたってたどり着いた、浜名湖北西にある標高三五〇呎の大知波峠の山林一帯に、建物群が展開する廃寺のみごとな風景を思い起こした。大知波峠廃寺は国史跡に指定され、静岡と愛知の県境、つまり遠江と三河の国境に位置する。現在は整備された建物跡の一々が明示され、一部の復元もなされて、市民がハイキングなどで訪れやすくなっている。

鐘ヶ嶽の遺跡も、欲をいえば近い将来、調査範囲を広げて本格的に調査するならば、私などの想像を裏づける確かな証拠も見つかるのではと期待させるのである。

2 愛甲郡の集落にある特殊建物

『鳶尾遺跡と愛名宮地遺跡』

厚木地域の北西部、荻野の平地を望む台地上にあった鳶尾遺跡は、主に古墳時代後期から平安時代の発掘調査以来注視されてきた。検出された堅穴建物（住居）は約一七〇棟に上り、掘立柱建物も一二〇棟近くある。出土遺物も墨書のある土師器、須恵器、灰釉陶器のほか、鉄製品、鉄滓、紡錘車などがあり、当時の生活、生業、社会を忍ばせる。このあたりは古代の愛甲郡印山郷だろう。

今、遺跡は住宅団地が建っているもので、一九七五年刊行の報告書（『鳶尾遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告七、神奈川県教育委員会）によって知るほかない（『厚木市史』古代資料編(1)にも略述される）。

古代の集落遺跡では、掘立柱建物は四面に柱穴を掘った坪掘（掘りかた）が認められれば側柱を持つ長方形の建物だと推定するのが一般的だが、鳶尾にはそれだけでなく、柱穴と柱穴の間を布掘

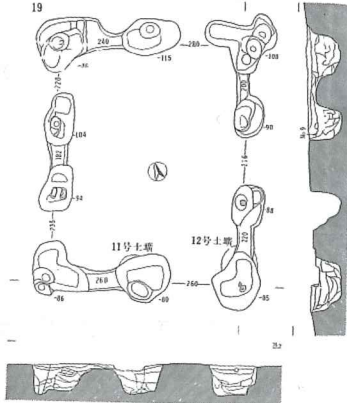


図3 鳶尾遺跡の掘立柱建物址 (19号)

という溝状に掘ってつないだ状態の特殊な例もあることが注目される。

四面を溝が全周せず

連続的な状態の例も含めると、報告書にはこの類の建物が六つほど認められる（16、19、26、34、59、64など）。これらは地面を掘って柱を立てる方式の違いなどでなく、柱と柱の間の溝に板や柴などを積んだり編んだりして並べ、壁を作る時の基礎工事の跡と解するのが妥当だろう。

次に、厚木地域の西部、温水、毛利台から高松山の麓の谷あいを進んだところの愛名には愛名宮地遺跡がある。ここは古代の英那郷である。基壇、礎石を持つ建物跡が見つかり、土師器の灯明皿、仏鉢形の須恵器、瓦塔（木造の仏塔を模した瓦質や須恵器の小塔）などの出土により、奈良時代末から平安時代中頃、つまり九世紀後半頃に及ぶ仏堂のあった遺跡として知られている（『厚木市史たより』一三・一五）。この遺跡も住宅団地が建っており、一九九九年刊行の報告書（『愛名宮地遺跡―県営厚木愛名団地建設に伴う発掘調査報告書―』、愛名宮地遺跡調査団）をもとに当時の山寺の景観を復元せざるをえない。

実は仏堂が造られるよりも前、ほぼ同じ位置に、八世紀後半、奈良時代と推定される大型の「掘立柱建物」一棟が建っていた。四面には溝が回って一六ほどの小柱の穴の跡が整然と並び、柱を立てるための基礎工事とされる。さらに三面の外側にも小穴があり、一面が空いた三面庇を伴っていた。「掘立柱建物」と称するが溝はすべて布掘方式で、四隅の柱は特に大きくない。後でのべる橘樹郡家跡の溝のある例に似ており、大壁建物に属するとみられる。建物内部には土師器以外に用途を示す遺物がないが、仏堂の前身建物だろう（近年、文化財保護課の発掘調査により、宮地遺跡のすぐ後ろの丘の頂上平坦面の愛名宮地遺跡第2地点で、九世紀後半頃の掘立柱建物五棟が東西に並び、その後の時期の、堅穴建物群四棟の営まれた跡が検

出された。宮地遺跡の仏堂と同時期に存在した建物があるといえよう。

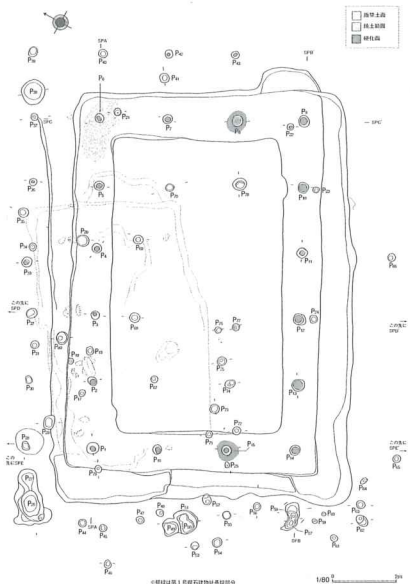


図4 愛名宮地遺跡の第1号掘立柱建物址

これらの溝をもつ方形の建物については、中田英氏に一九八一年以来近年まで、神奈川県域の例に注目した論考がある（「全周する布掘・「溝もち」掘立柱建物」『古代東国の考古学』慶友社）。中田氏は柱穴の間をつなぐ布掘状の浅い溝があるものを断続的な例も含めて「溝もち」掘立柱建物と呼び、溝が一定の深さに掘られている布掘と区別するが、どちらも掘立柱建物一般とは異なる古代の建物である。その後、日本各地のさまざまな例を集成し、朝鮮の百済の建物との関係を論じた青柳泰介氏の「大壁建物」の一連の研究がある（その一覧表に鳶尾遺跡は載るが、愛名宮地遺跡はない）。

3 官衙の大壁建物と渡来人

近年、関東ではこの類の建物のある遺跡の例が増えており、神奈川県域でもこれまで西部を主にして分布する一八棟が取り上げられている。全体を見て気づく点は、中田氏の指摘の通り、東西南北の四面をめぐる柱間を幅広い溝（布掘）でつないだ建物と、四面を細い溝でつなぎ、小柱ないし立木を並べた建物があることである。ともに学界

でいう大壁建物が該当するにしても、その内部構造や機能、用途がはっきりしない。同じ壁立ちの建物だとしても外観が少し異なるのではないか。

これらは確かに集落内、またはその近くにある例が多数を占めるが、私は古代の役所、つまり郡家（評家）またはその関連の建物に少なくないことにも留意したい。

八世紀前半頃の茅ヶ崎市下寺尾遺跡群の西方A遺跡は相模国高座郡家跡に、七世紀後半からの川崎市千年伊勢山台の正倉（倉庫）群などは武蔵国橘樹郡家跡に、八世紀以後の平塚市六ノ域、天神前遺跡などは大住郡家及び郡家関連の遺跡に当たるとみられるが、どれも大壁建物かそのバリエーションが認められる。西方Aの掘立柱建物は北の正倉群と南の政庁の間の施設群の一つで、四面の柱穴が布掘でつながり、溝の掘り込みに土を入れて突き固めた後、柱部分を坪掘によって掘り、柱を立てたとみられている。これは六ノ域遺跡の例も同じだろう。橘樹郡家跡で調査された例は七世紀後半、郡家造営以前の評家の時期の施設である。

さらに鎌倉市今小路西遺跡の鎌倉郡家跡の北約三百メートルにあるNo.21遺跡にもあることを、同市在住の岡本真知氏に知らされた。報告書によると、七世紀後葉の総柱建物の倉庫群に代わって八世紀には柱間を布掘の溝でつないで壁の基礎を作り大壁建物を造ったと想定できる（3、4、5）。これを寺付属の倉庫とする説があるが（大上周三「鎌倉郡家と官衙関連遺構について」『神奈川考古』四五）、総柱建物もその後の建物も、主に田租の稲（正税）などを納める郡家の倉庫（正倉）とみてもよいだろう。なお厚木市の相模川の対岸、海老名市本郷遺跡にも長大な大壁建物がある（厚木市愛甲の愛甲郡家以前の評家関連遺跡かとされる御屋敷添遺跡第10地点でも布掘状の一筋の遺構があるが、方

形の建物跡とは想像できない）。ほかに、関東では栃木県宇都宮市の西下谷田遺跡では溝跡で横材が出土している。また下野市の下野薬師寺に隣接する落内遺跡でも建物に溝跡がめぐっている。

こうして大壁建物は比較的大きな集落にあり、郡家などの官衙にもある。両者の時期はまちまちで先後関係を断定できないが、官衙での採用を契機に集落にも広まった工法、建築方式ではないかと憶測される。

古代の大壁建物は百済に起源があるとみられており、近頃、祭祀跡でなく大壁建物ではとして見直される扶余の艇止山遺跡はその一例である。日本では奈良県の御所市、明日香村、高取町のいわゆる葛城、飛鳥、滋賀県大津市の穴太などの地域に、溝に、小柱の多い壁のある建物跡の分布が目立ち、古墳時代に百済から来た檜隈氏をはじめとする渡来人の造った建物と考えられている。栃木県では新羅土器を伴うので新羅人が住んだと推測できる。

上述した橘樹郡家跡では、七世紀半ばから末頃にかけて、建物の四面または三面に、布掘してできた溝に小さい柱を列状に立てて壁を作った建物が何棟か検出された。調査した栗田一生氏は、評家を作る時に『続日本紀』に同郡に住んだと記される飛鳥部吉士氏のような朝鮮からの渡来人と関係すると推定した（『日本歴史』八二八）。私も日本列島にはない、渡来人の技術、技能によって始まった建築方式、大きくいえば渡来文化の影響であると考えた（『横浜歴史博物館ニュース』四三）。溝もち建物が逸早く注目した中田氏も、渡来人の史料を参照し、その技術が七世紀後半に相模に伝えられ、大規模集落の掘立柱建物の建てかたとして掘られ、それが布掘、溝もちの建物として出現したのだろうとする。

厚木市域、古代の愛甲郡の鳶尾と愛名宮地の二

つの遺跡は官衙の遺構ではない。直接、渡来人、渡来文化を示す遺物などはなく、文献にも伝えられていない。強いて考えれば、鳶尾出土の土器のなかには八世紀初め以後の周(唐)の則天文字を思わせる正の異体字のような墨書があり、周年号(永昌)を使った栃木県大田原市の那須国造碑は新羅文化と関係があるという説を連想させるもの、想像にとどまる。愛名宮地遺跡に知られる仏堂や仏教信仰は渡来人だけの信仰とはいえない。難い。大住、高座両郡の豪族壬生直氏には、配下に屯倉経営のノウハウを伝える渡来人の飛鳥部吉士氏がいた。本郷遺跡と壬生氏は結びつくともみられ、愛甲郡の場合も同じ可能性があるが、『厚木市史たより』一五)、なお確証の欲しいところである。

4 今後の課題と建物の系譜

鳶尾遺跡の報告書に載せられる同時期の竪穴建物(住居)の図面をみると、四つほどの住居に内部の四隅の柱とは別に、内部の四面を回る溝内に多数の小ピット(穴)がある例が注意される(13、14、15、25、37など)。

この竪穴建物内部の地面を掘って小柱を並べ立てる方式は、大壁建物の溝に小柱を立てて壁の骨組みにすることと関係があるのでないか。これらを立てた人(集団)として、上のように高座那家の遺構の場合は壬生直氏と飛鳥部吉士氏の関係が想定でき、屯倉の経営以来の両者の結びつきが考えられる。古代愛甲郡の鳶尾の集落、愛名宮地の寺やその周辺に渡来人がいたことを証明する出土品はない。

ところで、1で述べた鐘ヶ嶽の山中にあった確率の高い寺のイメージをあれこれ詮索するなかで、私は一二世紀後半から一三世紀頃の成立とされる、和歌山県紀の川市にある粉河寺の縁起を描いた『粉

河寺縁起絵巻』に何度も表れる庵(仏堂)の絵に注目した。



図5 粉河寺縁起絵巻(庵の場面) 国宝(和歌山県粉河寺蔵)

紀伊国の紀の川河畔の山麓にある同寺は、もと八世紀後半、宝亀年間、獵師の相伴孔子古の建てたという小さな草葺きの庵で、柴つまり成形した木の枝(梶木へびのき)という)を四面のうち三面に緻密に並べ立てて、横木で編んで押さえ、正面になる四面目にも左右両側を同様に編み、まんな中に作った出入り口も、同じく柴を使って観音開きで門のかかる扉に仕立てている。庵のなかには千手観音が安置され、周りに敷かれた緑のゴザの上に檜桶や三足の五徳がある。孔子古は相伴連氏と伝えられ、染め物の着物、袴、腰刀、巾着を帯びて、身分のある観音の篤信者として描かれている。

この絵巻では編んだ柴の底部が地面にどんな状態で置かれたかは描かれていない。だが溝状に掘られた中に縦に立て並べて壁を作ったことは想像できる。紀の川流域に渡来文化が及んだことも十分考えられる。一方、この種の建物は中世にも類似の建物があるようだ(五味文彦など『遺跡に読

む中世史』高志書院)。この庵は大壁建物と造りが似ている観もするが、まったく別の系統かもしれないとみる余地もある。

鳶尾遺跡などの建物跡が百済ゆかりの大壁建物と直接つながりがあるだろうか。粉河寺のものになった庵とは違うが、大壁建物ともおそらく無関係で、日本列島在来の作りかたではないか。つまり壁立ちで、見た目には同じようでも、建築の系譜の違いがあるのではという疑問が湧く。

要するに、溝の上に壁を建てる古代の建物は、果たして大和、近江などの例と同じく、渡来人から伝わった建築方式としてのみ理解すべきだろうか。さらに、この種の建物を大壁建物というカテゴリーでくくることが(バリエーションを含むとして)の適否も考え直さなければならぬ。在来の建築方式の系譜についても明らかにして、関係の有無を論じる必要がある。

古代の愛甲郡にあった鳶尾と愛名宮地の両遺跡の全貌を知るには、まだ説明すべきことが多くある。住居や建物の跡などはその一端である。一体どういう人が建て、どういう人の使う施設だっただろう。これらの遺跡は愛甲郡だけにとどまらない、古代日本の地域の文化や社会にかかわる歴史の実態、性格にアプローチする上で貴重な資料である。

厚木市史たより 第19号

平成30年8月1日発行

編集 厚木市教育委員会文化財保護課

発行 厚木市

住所 神奈川県厚木市中町三一七一七

電話 〇四六一二二五二〇六〇

FAX 〇四六一二三三〇〇八六

「厚木市史たより」は厚木市ホームページにも掲載しています。